Cumulative risk of developing prostate cancer in men with baseline prostatespecific antigen levels of 2.0ng-ml or lower in the kanazawa population-based screening cohort, Japan

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 樹佳, Sawada, Kiyoshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41968

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

論文内容の要旨及び審査結果の要旨

受付番号　医博甲第 2447 号　氏名　澤田　樹佳

論文審査担当者　主査　和田　隆志　印

副査　中村　裕之　印

藤原　浩　印

学位請求論文

題　　名

Cumlative risk of developing prostate cancer in men with baseline prostate-specific antigen levels of 2.0ng/ml or lower in the Kanazawa population-based screening cohort,Japan

邦　　題　初回前立腺がん検診で PSA 0-2 ng/ml であった受診者の経過についての検討

掲載雑誌名　Int J Urol. 2013 Dec 23. Epub ahead of print

PSA を用いた前立腺癌検診の有用性は明らかになり，本邦における受診機会も増加傾向にある．受診機会の増加とともに前立腺癌死亡率の低下が見込まれるが，検診を受ける年齢や PSA の基準値，受診間隔については一定の見解はなく，いまだ議論の余地がある．特に若年者で，かつ PSA 値が低値であった場合については、その費用対効果も含め我が国の医療費への影響も考慮する必要がある．そこで今回, 2000 年から金沢市で施行している一般住民を対象にした前立腺癌検診のデータを集計し，初回検診時の PSA 値が 0.0～2.0ng/ml であった受診者の経過観察の必要性について検討し費用対効果に優れた検診システムを構築することを主眼に研究を行った．

対象は 2000 年から 2011 年までの間に金沢市前立腺癌検診を受診した患者の中で，年齢が 54 歳から 69 歳まで・初回 PSA 値が 2.0ng/ml 以下・複数回受診の 3 要件を満たした 10653 名．PSA (ng/ml) を 0.5 刻みで 4 群（0.0～0.5，0.6～1.0，8 1.1～1.5，1.6～2.0），年齢を 5 歳刻みで 3 群（54～59 歳，60～64 歳，65～69 歳）に分類し受診回数，PSA が 2.1，3.1，4.1 を超えた人数，生検施行数，癌陽性数，癌の悪性度や受診間隔ごとの癌発見率について調査した．

10653 名のうち検診受診回数は平均 4.26 回（中央値 4 回）であった．PSA（ng/ml）が 2.1，3.1，4.1 を超えたのはそれぞれ 1405 名（13.2%），468 名（4.4%），215 名（2.0%）であった．生検は 309 例 (2.9%) に施行し 68 例 (0.6%) が癌であった．PSA が 0.0～0.5ng/ml では癌陽性者はいなかった．癌症例のうち，17 名（25.0%）が favorable risk（T1c かつ GS≪6 かつ生検陽性コア数 2 以下）であり，転移癌症例は 1 名（1.5%）のみであった．受診間隔に関して，PSA が 1.0mg/ml 以下であれば，初回検診から 4 年（54～59 歳）3 年（60～64 歳），2 年（65～69 歳），PSA が 1.1～2.0ng/ml では 1 年（54～64 歳）の間，癌陽性者はいなかった．

以上より，初回 PSA が低値であっても，複数回受診する中で上昇する例や癌が早期で発見される例があり経過観察は必要であることが示唆された．また PSA や年齢に応じて適切な受診間隔を定めることで，感度を下げることなく費用対効果に優れた前立腺癌検診システムを構築出来る可能性が示唆された．このことから学位授与に値すると評価された．